CHAIN No. 21

AN ORGAN OF FIB. CHEM. DEPT. DEC '65

◀目　次▶

総合合併について感ずること……相宅省吾……2
生への畏敬……2回生……小林新一……4
プロムナード……3回生……中村隆博……6
絵画……1回生……鎌倉伴和……12
陶器雑感……1回生……中村真知子……14
アドルフと不条理……C2……森田琢夫……15
想い出……C2……中村成臣……18
潯阜（中）……3回生……田中充……23
困談の困談……C2……平岡文二……28
西山……1回生……返見俊雄……33
卒論について……高分子講座……36
実習体験の記
　水疫研究室……37
　稲垣研究室……38
講座・雑感的批判……40
後輩諸君よ……44
編集後記……46

統合 合併について感ずること

相宅省吾

この一ケ月ほど、試験休みとか、文化祭の休講が続いたり、学会等で出歩くことが多かった。①十月末には、教室の人達と四国新居浜の住友化学、住友金属鉱山や松山の帝人、②十一月始めには、堺の理立地の見学、八幡製鉄、日立造船、関西電力等を見学する機会に恵まれ、③更に繊維学会で信州上田の信大繊維学部に行って帰って来た所である。そして、丁度その時Chainの編集者より、本学の統合問題やそれにともなうさまざまなことがらについて書けと云われたので、色々考えながら京に帰ってみると、④我々繊維をやっている人には見のがせないニュース、東洋紡と呉羽紡の合併が発表されていた。この様に、何等かかわりあいのないわずか一ケ月足らずの間に、四つの経験を通して統合と云う事について考えるのもまた興味のあることであろう。

住友財閥の拠点新居浜は、別子銅山の製錬より出発して派生的に色々な企業が出来て行った。特に我々に関係の深い化学工業は、鉱山の害（SO_2）を除くため硫酸を造り、更にこれを硫安等の肥料にすることから出発し、アルミニウム、アクリロニトリル、ポリエチレン、ポリプロピレン、塩化ビニル、ナイロンの原料たるカプロラクタム迄作っている。しかもそれが、すべて数万トンの量である。各工場が大きな港をはさんで100万坪の敷地に建てられており、互いにパイプをもって有機的に連なっている。しかも、数年前に建てられた新鉱工場が新しい製法の出現のためスクラップ化されたのも、目のあたり見るにつけても、過去から現在、未来に生きて行かねばならない、工業の、特に化学工業のすさまじさとか、また総合力、コンビナートの有利性と云えるものをつくづく考えさせられた。

更に次の日は松山に行った。三〇万坪に近い敷地に建てられた帝人のアセテート工場、特にテトロン工場は、老大学帝国人絹の起死回生の中核であった原料のテレフタル酸製造の主な三方法、ヘンケル法、メタルキシレン酸化法、ハーキュレス法がすべてフル運転しており、ずらりと並んだタンク内では、重合が行なわれ、更に膨大な量の製品が作られている。ここにも原料より製品迄の統合の工程は純粋な科学及び工学の集合であるばかりでなく、見る人には力強い美しさをもって我々に迫って来るものをもっている。

四国より帰るとすぐに京より連絡があり、堺の理立地を見学するからいかたがた一緒に来ないかと云う事であった。此所は今迄より更に規模が大きく、堺、泉北合せて600万坪の大理立地である。工場はまだ未完成ではあるが八幡製鉄の3000tonの世界第二の容鉱炉、日立造船の15万tonのドック、更に東洋一の関西電力の200万KWの大発電所を船と車を使って見てまわった。若しこの工業地帯が十分能力を発揮し始めたら、経済的地盤沈下に悩む関西が一挙に生気を取り戻す事になるであろう。そして工業は最早綜合化ないには成立しないことを身をもって感じたのである。

さらに数日前繊維学会があったので信州大学の繊維学部に行った。ここは云う迄もなく我々の学部と兄弟校である。古い建物や桑畑は昔の面影は消えてはいるが鉄筋の建物は計画通り建設されていた。学部の編成、学科の項目は農業的な繊維より、工業的な繊維（五学科）更に高分子（研究所）に完全に脱皮していた。そして互いに協力して綜合の力を発揮しようとしている。そしてこの様なことは東京の繊維学部（工学部）についても云える事である。

さらに昨日のニュース、東洋紡、呉羽紡の合併について、共に各々の会社の内情とかその首脳部の決心の理由については我々には解らないし、又知る必要もない。次に我々に考えられることは、これからの繊維はただ一つの綿とか羊とかナイロン、染色とかを別々の会社でやっていては成立しない所迄時勢は進んで来たのではないかと考えられる。

この様に工業は、科学技術は細分化、精密化すると同時に綜合化への道を歩んでいる。したがって教育というものもまたその流れに逆らう事は出来ない。我々の学部が繊維の中心の関西にありながら、また我国の高分子の発祥の地京都にありながら、更に新しい繊維の革命の時に遭遇しながら少しも発展しなかったと云えるのは如何なる理由であろうか、之は大いに討議する必要もあるが、これもすでに時を失したように思えてならない。この時機において文部当局の学部統合への基本方針と本学学長の実行力とがその困難を乗り越えての努力が実を結び二、三年後の我々学部の移転が殆ど確定した。この事は繊維学部の名前にふさわしい内容を備える起死回生の妙薬とする様努力しなくてはならない。しかしよく効く妙薬程作用の激しいものである。我々の移転統合は決して容易ではない。ただ各々の人達の考えている様に衣笠の地から松ケ崎に移動するだけではすまさず、心ある人々の智恵を集めて理想像を画き新しい大学を作り上げて行かねばならない。現在我々の社会は益々組織化され能率よく機能化されて行く。そしてあやふやな寄生的な無駄な存在は許されなくなって来た。それが統合、合併と云うその自然淘汰であ

ると認識して、各人が、また各集団が実力をもって生き抜いて行かねばならないと思う。

生への畏敬

C2　小林新一

最近2、3日東京で生活する機会を得た。気質の違った環境の中でいろいろ感ずいた事は多いが、目につくのはやはり若い女性である。繊維化学科に在籍している関係上、特に服装や化粧等に目が移る。一般的にいって大阪、京都の女性の服装、化粧が類型的であるのに対し　東京の女性のそれは個性的である。又関西の女性に比べて一般に案外質素であるようだ。東京は大阪に比べ物価が1.2～1.5倍程であり、下宿代も一畳当り1500円程高らしい。それで生活費が嵩む為、必然的にそうなるのかもしれない。しかし一方私は、彼女達が外を飾るよりも、内を飾ろうとしているのも一つの原因であろうかと考える。東京人といっても実際は地方から出て来た人が多いのだろうが、教養を身につけようとする意欲はより強いように思える。そしてそうした自分に対する優越感というようなものから個性的なものが生れて来るのではないだろうか？　服装は質素だがそれでいて大阪、京都の女性と東京の女性とではどちらが美しいかと聞かれたら、私は残念ながら東京と答えざるを得ない。

これはあくまで一般論であり、東京に対する私の潜在的なあこがれからきた偏見であろうから、大阪　京都の女性諸君、お気に召されるな。

こんなことを考えていると聖書の言葉を思い出した。私が物を考える時はいつも女性の事から始まるようだ。

それだから、あなたがたに言っておく。何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にまさるではないか。

―― マタイ伝6章25節 ――

我々は自分にとって真に必要であるものを求めず、あってもなくてもよいようなことを何と熱心に求めていることだろうか。物事の本質を深くとらえようとせず、そのまわりにある現象のみに心を動かしている事か。手段的なものを目的化している。本末転倒である。それはちょうど子供がおやつをねだり、彼の成長に必要な食事をきらうのと似ている。

[illegible]時代の勉強がそうである。試験さえよければそれでよいのだ。それは

学問の本質でもなければ、教育の本質でもない。しかしこれは現在の様な教育制度にあっては高校生の責任であるとは言えない。所がこれが大学にまで持ちこされるならば問題である。優をもらう為の勉強、これではさみしい感がする。大学生活は学問をかじるのに最も自由な時代だからだ。

結婚準備と云うと人はすぐに花嫁衣装や道具を考える。新婚旅行や披露宴の事を考える。結婚の本質的な意味を考え、その為の準備をしているのだろうか。

もちろん私はおやつを否定するつもりはない。むしろそれは子供にとって大切なものである。しかし食事は必要欠くべからざるものである

もし今、左右どちらの道を進もうかと悩んでいる人がいるなら、私は右にしても左にしても、どちらでもよいと言いたい。ただどちらを選んでも、あの時何うの道を選べばよかった等と思わずに、努力することが大切である。医者になろうが、商売をしようが、会社勤めをしようが、生きるという本質においては変らないからだ。本質的なものがないところには、学問も恋愛も自由も幸福もないからである。自分にとって真に必要なものをさがし出し、それをひたすら求めることをお勧めしたい。

去る9月5日、アルベルト・シュバイツアー博士が90歳の偉大なる生涯を閉じた。私はその時ちょうどクラブの合宿中であり、その死の前後の詳しい事情や、追悼の辞を読むことが出来なかったのが残念である。「尊敬すべき人物は？」と問われて「シュバイツアー」と答える人が多いと聞くが、私もその一人である。アフリカでの博士の事業や思想に対して、アフリカの若い世代からは、かなりきびしい批判が投げられているようである。それらの批判もわかるような気がするが、私はやはり博士の人格とその生涯に頭が下る思いをする。「生への畏敬（*Veneratio Vitae*）こそ、私の生きようとする意志の最も直接で、しかも同時に最も深いはたらきである。」

博士は若い時から音楽を好んだが、流行の音楽には耳をかそうともせず、生命の存在をまっこうから求めるバッハを最も好まれたそうである。又走ることが大嫌い。走らなければならないのは、仕事の段取りが悪いからだ。としかられるそうである。とにかく頑固な老人だったようだ。しかし私はこの頑固さが大好きだ。あれやこれやと流行に従って関心の対象が変る自分であるのでよけいそうなのだろう。この頑固さがあってこそ、その生涯をつらぬいて「生への畏敬」に生きることができたのだろう。我々も博士の生涯を倫理思想として受けとめるだけでなく、生涯を通じて「生への畏敬」に生きなければならない。

プロムナード　〔5〕

3回生　中村隆博

散策とは勝手気ままに、気の向くままに歩き廻る事である。元より必然的な目的地等ありはしない。何でもない道端の小さい、みすぼらしい草花にも心を動かし、しげしげと眺める事もあれば、綺麗たる桜花にも、歩みも止めずに通り過ぎて行く事もある。散策とは本来そういうものだから。

－－－－－－－"プロムナードの為の広告"にかえて。

秋の日の
ヴィオロンの
ためいきの
身にしみて
ひたぶるに
うら悲し

これはヴエルレーヌの詩を上田敏が訳詩した、有名な"落葉"の一節である。上田敏のこの訳詩が、名訳であるといわれる所以は種々あると思うが、私自身の考えでは、その最も主なる所以は、その豊かなリズム感にあると思う。その事はヴエルレーヌの同じ詩の堀口大学による訳詩と比較すれば、明らかになるのではないかと思う。

秋風の
ヴィオロンの
節なかき啜泣き
もの憂きかなしみに
わがこころ
傷くる。

大学の詩も、敏の詩も、その情調という点では共に名訳詩といわねばなるまい。しかし、大学の訳詩には、幾分リズム感に欠ける恨みがあると思う。今、リズムと情調という言葉を使ったので、このあたりから、今回のプロムナードの歩みを進めて行きたいと思う。

詩、或いは更に普遍的に芸術の二本の柱があるとすれば、それは、今挙げた、リズムと情調であると私は思う。勿論これは一般的に言ったまでで、リズム感が情調より豊かに存して、それが主体となっている作品もあれば、又、

逆にリズム感より情調を主体としている作品もあり、それらの二本っまり二つの要素が、等しく二つながらに存在するとは限らない。例えば、音楽を例に挙げれば、最近流行のエレキギターで演奏される種類の音楽は、リズムを主体とした音楽であるし、映画のテーマミュージックetc.は情調を主体とした音楽が多い。"エデンの東"のテーマミュージック等は、後者の代表的なものと言えるだろう。

ところで、作品自体にも、この情調を主体としたもの、リズムを主体としたものの二つがある様に、それを鑑賞する側、即ち鑑賞者にもそのリズムに感動しやすい人と、情調に感動しやすい人との二つのタイプがある様に思う。それは又、民族全体を一つの鑑賞者と見立てた場合にも言い得る事である。そして日本人はどうかというと、他の民族と比べて、リズムより情調を好むタイプであると思われる。というよりは、むしろ、リズム感に欠けると言った方が良いかも知れない。その事は、日本語の性格や、古来から現在に至る迄の日本芸術の変移を眺めれば容易に理解されよう。戦後になって アメリカ文化の絶対視の傾向の風潮の一つの結果として 音楽の面で、従来の日本では、余り好まれなかったリズムを主体とする音楽が流入され、最近に至って、エレキブームなるものを巻き起しているが、この事は、種々の複雑な問題を併せ持っているにしても、日本人のリズム感の育成という点では大きな役割を果して来ている事を認めねばなるまい。

又ここで、今、日本語の性格という事を云ったので、この事について少し考えてみよう。

外国の諸言語（と云っても私自身英語と独語をほんの僅かばかりやっただけで、余り決定的に断を下すのは気がひけるけれど----）と比べて、日本語の特徴は、第一にリズムの欠除という事である。これは日本語の最大の欠点であると思われる。第二は、その含蓄の豊かさである。これは日本語の最大の長所である。含蓄の豊かさは情調の豊かさと置き換えても同義である。日本語のリズムの欠除の証拠の一つは、古来、我国に good orator（名演説家）の生れなかった事を挙げて良いと思う。固定感念の強い人には、理解してもらえないかもしれないが、情調（含蓄、内容）とリズムとを比した場合、どちらが人の心を動かす要素となり得るかと言えば、それは リズムの方であると私は思う。"不言実行"が美徳と考えられて来た我国に於いては、内容のみが重視され、その表現が余りにも軽視され、リズムがその内容（含蓄）よりも人の心を動かすより大きな要素である等といえば、まだまだ"形式主義者"とか"要領の良い奴"とか"口先だけで何も出来ない奴"とかといっ

たレッテルを貼られかねない現状である。しかし、今言った事はかなり真実であると考えられる。幼い頃、正月等、大人等の百人一首のカルタ遊びの情景の記憶を思い出してもらいたい。大人達の読み上げる歌に何と心をひかれた事か。あの歯切れの良いリズム、歯切れの良い抑揚に！　しかし歌の意味等、とんとわからなかった筈である。リズムのみ優れていて、内容の乏しいものは、一たん人の心をとらえても、すぐ又忘れ去られて行くものであるという事は勿論であるが、先づ第一に人の心を引き付けるものは、内容より、リズムであるという事は疑いもない事実である。ところで、演説に於いて第一に問題となるのは、人の心を動かす事、即ち感動させる事である。人の心を動かす事が出来なければ、名演説とはなり得ない。そして人の心を動かす最大の武器がリズムであるとすれば、名演説の生れなかった日本に於いてはその言語、即ち日本語に根本的にリズムが欠けていると結論する事が出来ると思う。蛇足ながら、日本に叙事詩なるものが発達しなかったのも、同じ所に原因があると考えてよいのではないかと思う。そうすると　人の head ではなく heart に訴え、人の心を動かそうという性格を持つ芸術の分野において　その表現材料、表現手段、即ち文学の場合なら、言語にリズムが本質的に欠除している、若しくは、他国語に比してはるかに劣るという様な場合には、それで以って作られた作品が如何であるかという事は、言を待たない。従って、リズムの点で劣る日本語を用いての日本文学は、宿命的に、その点に於いて不利であると言わねばならない。

ところが、そういう宿命的な欠点を補い、日本語の最大の長所たる含蓄の豊かさを最大限に生かそうとする試みは、意識的にか、又は無意識的に必然的にかは解らないが、古来から日本文学に於いて為されて来、そして、一応順調に発展させられて来たように思う。つまり、日本文学の一つの典型と考えられる俳諧と短歌とを私は意味しているのである。

五七調、七五調が取られたのは、リズムの少い日本語に於いて、確かに、そのリズムの豊かさの極大点をそこに見出して来たからであろう。或いは、十七文字、三十一文字という短い言葉で表現するという手段は、日本語の最大の長所たる含蓄の豊かさを最大限に生かし、冗語を徹底的に除外して、そこから生れ出る独特の持味を引き出す為に考え出された、若しくは、見出されて来たのであろう。

十七文字や三十一文字（正確には十七音、三十一音）の芸術に他国に例をとらない（今迄の私の見解によれば---）　恐らくこれからも、他国には生まれないであろう。それは、他国語（例え、中国語 etc. の日本語と本質的に

共通した言語を除いてしまはそれ程 言語に語へ難いものがある。
逆に相等する様な芸術形態乃至は作品が見出されない事を考えて見ても、
の点に於ける日本語の優位性は証明されよう。

そうして見ると、日本の芸術、特に文学について考える時には、この日本文学の典型たる俳諧と短歌が、先づ第一に取り上げられるべき主題となる様に思う。俳諧は、室町末期頃から、俳諧連歌の発句として行われ、松永貞徳の貞門、西山宗因の談林によって、一応芸術としての形態を整えるに至り、池西言水、小西来山etc.の流れを大成させた松尾芭蕉によって完成されたもので、その特徴は、情調の瞬間的把握にあるとされている。極端に言えば、写真芸術と同類の表現方法をとっている訳である。従って、その作品が生きるか、死めかは、作者の機智に大きく依存して来るのである。平安朝女流文学の代表的作家の一人、清少納言の"枕草子"が同時代の紫式部の"源氏物語"に比して俳諧的と評されるのが、この点について考えられているのだと気付けば、それから逆に、俳諧の本質もかなり明白に理解されよう。

夏草や　汽罐車の車輪来て止る　　中村草田男

この句を読まれれば、今言った事の意味が、いっそう明白になるのではないかと思う。最も俳諧らしい俳諧とはこの句であろうと思う。

線路極まで生え繁った夏草の中に、二本のレールが敷かれている。汽罐車が蒸気を吸いながらゆっくりやって来て、そして作者の目の前で止る。最初のうちは、読者の視野には、線路脇の夏草も、汽罐車の車輪全体も存在するが、最後の"来て止る"という部分に至る時には、読者の目には大きな、ダイナミックな車輪しか映じない。自分がその車輪のすぐ前のレール上に横たわって、その車輪を見詰ている様で、その汽罐車にあわや轢かれるかという様な錯覚まで覚える。汽罐車の車輪は夏の太陽をまぶしく照り返している。…といった句である。読者の目は勿論作者の目と置き換えて差し支えない。"夏草や"という言葉を使いながら、最後には、読者の目を車輪に釘付けにしてしまっている点　これはさながら絶妙に焦点の合わされた写真の様ではなかろうか。更に、夏草やと最初の広い視野から、最後の車輪という狭い視野へと収束させる事によって、時間的な方向性をも感ぜしめ、その収束点を汽罐車の止るその微妙な瞬間と、読者の頭の中で置き換えされる事によって、写真のシャッターチャンスの絶妙さで"来て止る"瞬間をとらえている。

草田男の句の所感が長くなりすぎてしまった様だが、とにかく、俳諧の特性は、瞬間性であり、それは、作者の機智とつながり、写真芸術とアナロジーを有するという事である。

わび、さび、しおりを盛り込み、幽玄、枯淡の境地を開いた松尾芭蕉の句には、単に、瞬間性、機智では片付けられない、趣きの深さが存在するが、私自身は、これを俳諧の本質と考えるよりは、芭蕉個人の並はずれた才能の所産と考えたい。写真芸術が芸術としては、矢張り限界が存する様に、俳諧そのものも又、芸術としての限界がある様に思うのである。芭蕉は並はずれた詩感の持主であった故に、短歌に比類し得る深みを創り得たが、並々の芸術家では、とうてい短歌に比類する芸術を創り得ない様に思われる。話が解かり難くなったかもしれないので、更に言えば、芭蕉が、俳諧でなく短歌に道を求めておれば、更に優れた作品を残し得たのではないかという事である。

俳諧の瞬間性に比して、短歌は永続性であり、情調それ自体を本質としている様に思える。短歌は、古来、宮廷・殿上に於いて、長歌、旋頭歌、仏足石歌等と共に、和歌の一形態として発展させられ、現在迄残存している唯一の形態である。宮廷を中心として発展したせいもあって、格調が重んぜられ、雅趣〝みやび〟が尊重されて来たのである。近代に至って、生活感情が読み込まれる事が多くなり、又、それが、初心者に受け入れられ易い所から、一派を為すに至ったけれども、短歌の本質からは外れた形態であると思う。なる程石川啄木の歌は我々の胸に鋭く飛び込んで来るし、又、啄木調の歌は実に初心者にも詠み易いものである。私自身、未だ初心者であるから、歌を作れば、いつのまにか啄木調になってしまう。そして又、彼の歌には最も親近感を感じさせられる。勿論啄木も優れた歌人であり、その作品も、独特な趣を有するものであるという事には異論はないが、それは歌の本質から外れたものであり、啄木の歌を発展させても、世界の芸術にはなり得ない事だけは確かであると思う。

万葉の昔にも山上憶良等、生活感情を盛り込んだ歌を詠んでいる事もあるが、彼等は、決して格調と〝みやび〟を失う事なく生活感情を読み込んでいる様に思える。これは、憶良等が下級とはいえ、宮廷に仕える身分であった事によるものと思われ、現在の状況では、この様な歌風は不可能に思える。短歌の最も短歌らしい作品はどれかと想い浮かべても、特定のものは浮かんで来ない。しかし、歌風から言えば、私自身、古今調の歌風が短歌の最も本質を把握した歌風でないかと考える。少なくも、古今調歌人達の目標とした所が、最も、短歌の本質的な目標ではなかったかと思う。

上田敏の訳詩から話が外れて、俳諧と短歌へと話が進んだ。想いつくまま、どんどん筆を進めたら、書く必要のなかった事迄書いた様な気もし、又、更に書き加えねばならない事を落した様な気もする。しかし、散策には、目的

こそあっては、勝手気ままにただ黙々と歩み進めるだけである。まさに我人生に似ている様だ。生れた時から死ぬ時迄の目標等有りはしない。その時、その時、刹那の目標や意義を感ずる事はあっても、永遠の目標が人生には有りはしない様に思える。ただ、長いながい道を黙々と歩いて行くだけの様に思える。しかしながら、或る時々、後を振り返って見る時、そこに、意識せざる明確なる一本の糸――道程――が存在するのに気付くのである。この頃、嵯峨野周辺を散策した時、ふとこんなことを考えていた。

嵯峨野路の秋

嵯峨野路の秋は深々
我れ一人今日もさぶろう
道のきわ、半ば枯れたる
いのころ草、小さき一本(ひとも)
ためらいと、穂を垂た気に。

田のあぜは萌ゆる紅い
彼岸花咲きて競えり
黄金なる稲穂のきわに
深みゆく秋に染りて
今まさに、盈りかりける。

野の草は、バッタ跳び交う
夏の日は群れて飛び来て
我が胸の幼な情(ごころ)を
慰めし、赤きトンボは
今ははや姿も見えず。

嵯峨野路の秋は寂寞
口笛の声も空しき
我がもたる柿の古木の
未だ熟れぬ青き実一つ
風に落つ群草(むらくさ)の中。

絵画

1回生 鎌倉伴和

私が絵画に興味をもちはじめたのは、はたして何時ごろのことだろう。少なくとも絵画の中に、〝美〟なるものを感じはじめたのはさほど遠いことではないように思う。いろんな美術全集の一枚一枚をひもといてゆき、心の底から静かにながめていた時、自分というものの存在を忘れ、その絵の中に自ずから引き込まれ、人間の美、そして人間性にふれ、心の中で感動を覚えたものだった。それにはまず私は高校時代の友人であるOという人物をあげねばなるまいと思う。彼の下宿の片隅で、彼の蔵書をひもときながら、また図書館で一人絵画と親しむとき、私の心の中に次々と新しい知識と、感動をふりそそぐことを勧奨してくれた。先日高島屋で裸婦展が開かれ、その感動を東京にいる彼のもとへ伝えた時、次のような手紙が私の手元に着いた。

----裸婦展の写真ほんとにほんとに有難とう。一頁一頁に心がおどり、胸が高なり、これが実物の絵であったらどんなに素晴らしいであろうかと思わずにはおれないようなそれが多くあった。見終ってこのよろこびを送ってくれた君に目を閉じて感謝し、そして今またそれをめくるのだ。そして例のごとく自然の力の偉大さを感じ、またもや感嘆せずにはおれない。つきとめ得ないあの様な完全なる美を創造するという奇跡をいともたやすく自然は成しとげてしまうのだからね。女性を見、ただその素晴らしさ、完成された美しさを素直に感じるという様な殊勝なる目はとうてい俺にはもち得ないかもしれないけれど、描き出された美を見て〝ああ素晴らしい〟と感じ、楽しみ、そして感激し得るというよろこびは俺にも少しばかり持ち得るらしい。美しいものを見て、心底から美しいと感じ得るよろこび、それほどに尊いものが他にあろうかと思う。以前からもっていた数枚の裸体写真の中に、或る不徳感を見、最近破り棄ててしまった。ただ美しいと感じて集めていたものであったはずだが---- 黒田清輝の絵もあったね。この人の展覧会が開かれているので明日行って来ようと思っている。最近は諸物価値上りの折りから中々本を買い求めるわけにもいかず残念だ。でも今日はルーベンスの画集が出たので早速買ってきて書棚に入ってもらった。この人の裸体画を見ていると、しまいには息苦しくなってさえくるみたいだ，云々------」

と書いてあった。私の絵に対する関心は少し片寄った所があるかもしれない。

三がしかし、その専門家になる訳でもないし、自分で楽しみ よろこ び
ずればよいと思っているからそれで十分だと思う。

自然の有機体の構造がもつ不思議な美しさ、女性美によって代表される美、そして少女、子供のもつ素朴な表情における美に対して、私は絵画における すばらしさを発見してゆこうとしている。

同じ裸婦を描いたものでさえも、その美しさはさまざまであり、官能の美しさ、鮮烈の美しさ、長愁の美しさ等々あるが、それにはやはり、それぞれの画家が同じ女体から異なる美しさを汲んだということだと思う。又同じ画家が同じモデルをえがいた時でさえもそれが見うけられる。そのどれもが女体の美しさであるにはちがいないが、私にはそれが、それぞれの画家の眼をかりなければ見いだされない。nude写真や、裸体に出会う時、そこには、sexrualな何物かを感ずる以外に何も感じ得ないのである。そしてそれが単なる悦楽というものを越える時には もはや私の心には逃避さえ起ってくる。だから画家によってえがかれたもののあとを虚心に追うよりほかはないのだ。ある人はRenoirについて次のようなことをいっている。「Renoirの色は自然が模倣しようもない色である。絵と見るものとの間に、並々ならぬ緊張が生ずる。その緊張は固苦しくも息苦しくもなく、むしろ緊張そのものに一種の快感を覚えながら、現実の慰めというものではなく、もっと深く、遠い所へつれて行かれる。緊張関係の生ずる空間は、たしかに現実の空間に相違ないのだが、実は作品と見るものとが協力して創り出す一種の架空の場なのだ。言いかえれば、並通の五官ではとらえることのできぬ、創造された空間なのだ-----。」と。まさにRenoirにおいてはそのものだと思う。

この様に感覚と官能による絵画の世界に人間性、大げさに言えば人間愛、生命の充実感を味わうことができるのだと思う。

人間の歴史において、芸術作品が哲学的著作と同様に、人間の知性をみがき、文化を促進させてきたということが、はっきりといえるのではないだろうか。

陶器雑感

C1　中村真知子

近鉄学園前でおりると、近代的な円や四角のビルがならんでいるのにびっくり。日本ばなれした清潔な町であった。アスファルトの坂道を10分ほど歩くと、松林にかこまれた丘の上に大和文華館があった。ホテルと蔵の合いの子のような外観、建物の中庭としてまん中に立派な竹が植えてある。まわりはすべてガラス張り。初めはいいなと思ったが、ろくに日光も当らないところで、ガラス張りの中にとじこめられている竹が、かわいそうになってきた。陳列の陶器は唐、宋、明、清のもので全部でクロ点ばかり。

永楽宮展のとき見たほど感動しなかったが、均窯の水色の鉢、オリーブグリーンの瓶、黒と緑の交った盃、ピンク色の釉裏紅の皇子寺、美しいものがかなりあった。染付、天目、青磁、白磁、赤絵、唐三彩、その他種類も多かった。

陶器というと、すぐ茶器のことをもちだす人がいるが、たしかに尤悦の楽茶碗も、志野も、瀬戸もけっこう。ひびわれたり、ゆがんだりしているものに、わび、さび、といった一種の美をみいだした昔の人の審美眼にも感心する。だからといって不完全なもの、常識的には美しくないものだけをとり上げるのは、ひねくれていると思う。いや陶器にかぎらない。茶道というものに反撥を感じるのは、茶道というのは岡倉天心のいうように茶の宗教なんてものじゃない。（もっとも利休といえば何でもありがたがるのは一種の信仰心かもしれないが）よせあつめとのぞき見趣味だと思う。

過去においては、茶は芸術であった。茶室を作り、茶器をもってきて、軸をかけ、一種のムードを作り上げることに創作があった。しかし現代の茶道におけるように、はいこれが何代目某々斎作の茶しゃく、軸は----、茶碗は---、茶室は江戸時代の---、というのでは、時代錯誤もはなはだしい。つり堀が大人の金魚すくいであると同様、大人のままごと遊びにすぎぬ。又、これが日本の芸術なんていって大きな顔をしてのさばっているのだからひどい。茶道の悪口をいうつもりはなかった。ただ美しいものはすなおに美しさをみとめるべきだといいたかっただけ。

なぜ、そんなに陶器にひかれるのかとよく聞かれるが、陶器の場合、その一つの器の持つ小さな、それでいてすべてを圧倒する強い、独立した世界、

その世界に見るものを、うむをいわせずひきずりこむ　その吸引力につよく
私は思っている。だが口で説明しても何もならない。本物をみて、自分で感
じなければ-----。

大切なのは、理性より感情であると私は思う。

アドルフと不条理

C2　森田琢夫

ああひえびえした霧が垂れこめる。
　この谷の底から
逃げ出せる道があればいいに。
　そうしたらどんなに嬉しいだろう。

シラー「あこがれ」

時間が歩む。一切の抵抗に無関係に時間が歩む。刹那は過去へ追いやられ状況は終末に繋がれる。人間は時間から離れることの出来ない不条理な存在である。人間に言葉が与えられ、思惟するうちに既自性を観知した時から、我々は限界状況を殊更意識する対自存在となった。そして超越した明知が、その冴えきった眼光で四方三界を見渡した時、我々の内感は寂寥で震撼するのだ。神はもはや存在せず、絶体的普遍的な行動基準を持たぬ我々自由な人間に、永遠の伴侶として与えられたのは不安であった。行動は全て自分の手に委ねられ、しかも行動の目的は遂に現われようとしない。

「然しわたしの欲するのは、追い越され得ない目的、真に目的である目的を選ぶこと」なのである。

眼路遥々とした広漠たる不毛の地に佇り立って、彼は為すべき業に腕をこまぬく。「だが限定されているのだ」と、合点の行かぬ体在、本能は行動を急く。しかし追越され得ない目的、限定された中での真の目的を見出し得ない超越した明知が、依然として行動の断を下さない。この緊迫した両者の相剋の中に生きなければならないのが我々人間の宿命であろうか。

何はともあれ、不条理の中に住み且つ生きている人間にとって出来得る唯一の企ては、冴えきった明知で全視を眺め渡すことではなく、明知で分析され、限界とされた一切の事々をそうであらぬところのものに誘導すべく務めることである。直感的蓋然性が「誘導不可能」を標榜する中にも、彼はシシフォスの執拗さを固執しなければならないのだ。さもなくば明知を和して虚

有に生じ、するかである。戸惑うことなく、初めから人間の不条理性に顔を背向けるかである。だが人間が一旦不毛の地の異邦人(エトランゼ)となった日から彼は生を終末から見ることを忘れきれない。瞬間を生き延びた彼も、その瞬間が無限過去となるや突如生の断絶を意識せざるを得ないのだ。我々はその例をアドルフに於て見出す。

十九世紀の頽学コンスタンは極微な意識の中にアドルフという性格を創りあげた。アドルフとは常に死の観念を皮膚に纏った理知と感性の合致しない存在であった。人間の本能とも言うべき自尊心と、生の終末を充分心得た離反的な人物なのである。早熟な彼の明晰が「人生をその全面から眺め、常にあらゆるものの終極として死を見つめ」[三]た時から彼に運命の無常をしみじみ感じさせた。アドルフに於ける死の観念は実に絶大な力を有していて「どんな激しい煩悩の中にあっても、常に死を思いさえすればたちまち気が鎮まる」[四]程であったのだ。

この点同じ不条理性を看破した二十世紀の抵抗者ムルソー[五]とは区別される。アドルフにとって死とは絶対的な限界状況であり彼に重く押し掛ってくる存在である。それに対してムルソーは死を嘲笑い侮蔑することにより限界状況を乗り越えようとする。ムルソー程の執拗さを持たぬアドルフの生存の仕方は、不条理の中で生きなければならない人間の揺籃型の典型である。即ち彼は冷え冷えした不条理の公間で一番苦しまねばならぬ存在にあるのだ。

アドルフは生存する。死の観念を皮膚に纏って。彼の前には空虚とした死の壁がはだかる。だが心の奥底から抜知らぬ「感性の欲求」[六]が彼の内感を揺る。生きたいのだ。否、生きているのだ。この「欲求」が一度たりとも満たされたことはなく、又決して満たされないであろうことを重々知り乍らも敢えて探し続けねばならない彼なのだ。彼とエレノールの恋愛の終末は始発から承知していたことなのだ。恋は「やがてはもはや存在しないであろう」[七]ことを充分知り抜いていた。死の観念は生におけるもろもろの行為をも終末から見る方向に人を誘う。しかし恋は「存在している限りは、それに先立った時期と、それに続くべき時期との上にその光を投げかける」[八]。彼が救いを求めたのは実にこの瞬間的生であったのだ。彼にとって比翼連理の恋は決して存在すべき筈はなく、あるとすれば生への姑息手段的な恋でしかないのだ。従って彼のエレノールへの結晶作用とはスタンダール的な意味での結晶作用ではなくサルトル的な意味での結晶作用であったのだ。エレノールは「回路の中に置かれている一つの導体の役をするものでしかない」[九]、彼女を通して「世界全体を独占しようとめざす」[十]ところの、もっと厳密に言うならば生を瞬

主に顔を
う彼は生
瞬間が終
の例をア

性格を創
命致しな
分心得た
眺め、常
をしみじ
いて「ど
気が鎮ま

別される。
てくる存
限界状況
存の仕方
即ち彼
だ。
とした死
恢感を揺
とも満た
らも歌え
始発から
う(十)こと
終末から
立った時
いを求め
決して存
のだ。従
晶作用で
回路の
通して
ず生を瞬

主人公にも感じさせてくれるとこころもとでもいなかったのだ。故にアドルフ。エレノールの心を捕え、それが過去となる瞬間恋はもはや存在しない。恋を痛動し、自分は彼女を愛しているのだと心に言い聞かせ、やっと心の奥まで達したのに彼の愛は無残や頂上で消え果てるのだ。結局エレノールは尊体の役を責さず、むしろ彼に再び生の断絶を意識させる絶縁体の役をなすに過ぎなかった。アドルフは再び冷えきった不条理の谷間に降りてゆかねばならないのだ。死の観念に尚も纏わられて彼は一体どう生きようとするであろうか。カミュの「ドン・ファン」(十一)のように再度新しい恋に瞬間の生を築こうと試みるだろうか。否、もはや恋という手段は使うまい。ドン・ファンは一つの愛の終結とともに次の新しい愛を始めることにより瞬間的生を連続的な生に転換することが出来た。それは彼が愛する為に創られていたから可能であった。だがアドルフは生きる為に創られている人間であったのだ。たとえ恋が瞬間的生を感じさせる生への姑息手段であるとしても一旦実感した生の断絶の意識は大き過ぎた。弱い性格を荷負ったアドルフは不条理の谷間で一体何を思っているであろう。ムルソーやシジフォス程の執拗さを持たぬアドルフにとって現在為し得ることは一体何であろうか。おそらく猛烈な無聊の中で、ギリシアの神代を焦れ続けることではあるまいか。殊にあの幸福な彫刻師ピュグマリオン(十二)を、そして彼に幸福を授けた神アプロディテを。彼は狂乱して叫ぶに違いない。「もはや神の存在しない人間にとって如何に生きることの至難な事か！」と。

時間は歩む。一切の抵抗に無関係に時間が歩む。瞬間は過去へ追いやられ、状況は終末に撃がれる。人間は時間から離れることの出来ない不条理な存在である。

註

(一)手塚富雄訳 (二)ボボワール「人間について」(青柳瑞穂訳) (三)コンスタン「アドルフ」(大塚幸男訳) (四)アドルフ(同) (五)カミュ「異邦人」中の主人公 (六)アドルフ(同) (七)アドルフ(同) (八)アドルフ(同) (九)サルトル「存在と無」(松浪信三郎訳) (十)カミュ「シジフォスの神話」中「ドンファン主義」(矢内原伊作訳) (十二)ギリシア神話、女性には厭むべき欠点があるとして生涯結婚をしないと誓ったピュグマリオンが自分の手で無欠な象牙の処女を創りあげる。があまりの出来映えに恋してしまう。そしてアプロディテの祭に願をかけ、遂に象牙の処女が生命を持った彼の妻になるという話。

想い出

C2　中村成臣

私は晴れた秋のある日下痢の一瞬でふと幼年時代の楽しき夢想に享ずることになった。それは現在のマンガの世界でも、テレビの一コマでもない素朴な「過ぎし良き時代」の片田舎における腕白小僧の世界である。学校から帰った私はランドセルを縁側に放ったまま、直くの神社森に飛んで行った。ズボンのポケットには「メンコ」「ビー玉」等、武器ならびに戦略品でかくらんでいたことだろう。森には我々ターザン一団がいつもの顔をそろえた。20米もあろうと思われる大木に、その頂までのぼり「ヤッホー」とくり返えす。又その木に垂れ下ったつたや、家から持ち寄った綱でそれら木から木へとターザンの如く飛び移っては喜声を上げた。時には木で入念に作ったナイフをさし、時にはそれを口にくわえて仲間と妙技を競い合った。それだけではすまされない我々は木から降りると笹と自転車のスポークで作ったスギ鉄砲で打ち合った。これは後に紙鉄砲になり、今でも紙を口でかみ、玉にしたあの感触が口に残っている思いである。いつの時代でも子供が作り上げた英雄というものがある。我々のその時代には鞍馬天狗があった。チャンバラは我々の生活の一部分となっていた。大小二つの刀を腰にさし、それも藤の木なんかで作った自慢のもので、その刃に赤チョークをつけて切られた時の血とした。顔には手ぬぐいで作ったマスクをつけ、目を輝やかせ鏡をのぞいたものだ。今の子供がこれをやったらきっと教育ママたちは目の色を変えてその危険さを説き、その息子を温室に引きもどすことに努力を惜しまないだろう。ところがチャンバラ合戦で傷をした記憶は、私の場合ほとんどない。子供による子供の考案した遊びなのであろうか楽しかった記憶のみが記憶を支配している。チャンバラ同様面白い遊びの夢がはてしなく広がる。

「メンコ」「ビー玉」、これは地方によって呼び名を異にするらしいが、それを知るすべもない。ビー玉の最も簡単な遊びは地表に一つ置きそれを真上から片目でねらいをつけて落しうまくそれにぶっつけるもので、これを「耳かちん」と呼ぶ。もう一つは地表に長方形の線を引きその中央に三角形を書きその中に自分のビー玉を数個ずつ入れ長方形の枠外から他のビー玉でそれらをはじき出すもので、その分は自分の勝利品になる。又学校の帰り道にやるもので相手の玉を遠くから狙いをつけて当てる競技である。これらの他にも

臣

等するこ
ない素朴
校から帰
った。ず
でかくら
えた。20
り返えす。
木へヒタ
ナイフを
けではす
ギ鉄砲で
したあの
た英雄と
ラは我々
の木なん
の血とし
いたもの
てその危
だろう。
子供に
を支配し

が、それ
を真上か
た「耳か
形を書き
でそれら
直にやる
の他にも

天一遊び方があるが紙面の都合より省く。メンコも大切な我々の玩具であった。遊び方も種々で「めくり合い」「箱落し」など日の暮れるのも忘れて興じたものだ。「箱落し」ではできるだけメンコの重さを増すために油をつけたり、二枚重ね合せたり、布をはったりして工夫し、「めくり合い」では両面同じ図柄のものをはり合せるというトリックをしたことも覚えている。私はメンコが強くいつもブルジュアを誇っては、毎夜ふとんの中で今日の戦略を教えるのが楽しみの一つであった。そして「ポッチャンコロコロ」で興奮したビー玉の事を夢みていた。これは土を円錐状に積み上げ、そこにビー玉とかどんぐり、栗の実が通る道をつけ、トンネルを作りそのすそ野に穴をつけ、沢山の小さな穴をあけた。今でいうゴルフの穴の様なものでその穴に玉が入れば何点、穴をうまく廻らなければ減点とする、今のパチンコに似たものであった。その他カンを用いて鬼が「ぼんさんが屁をこいた」と百まで数える間に姿を消し見つけられては、仲間がカンを蹴ると、又その間に隠れる「カン蹴り」や地面にまるを沢山書き遊び方は忘れたが「けんぱ」というものもあった。更に「石当て」といって石を用いて足をくぐらせたり、頭の上から落したりして相手の石を倒す遊びや、はじきを使った「陣取り」遊び、又コマ回しでは手の平にのせたり、綱を渡らせたりしたもので遊びの種類は列挙めいとまをみない。この頃「かけっこ」も盛んで、かまぼこの板に釘を打ちつけそれを足にまきつけてはスパイクがわりとして大選手を夢みていたのであろうか。「戦争ごっこ」など今でもしたくなる遊びである。帽子を横にしたり後にしたりして「大将をやっつけろ」なんていって敵の陣地にのりこんだ頃の郷愁がとめどなく湧き起ってくる。この頃学校では「竹のぼり」「でこさし」「どん馬」(一人が柱を背にして立ちその両足の間に首をつっこみその後につづいて馬を作り他のグループが同人数だけその上に馬のりするもので、馬がくずれては大いに観声を上げたものである。)「かくれんぼ」「宝ごっこ」「S合戦」(二班に分かれてS文字の中の者を引き抜く競技)など休み時間にはよくやった。小学校の先生は全科目担当していたので社会科の好きな先生は一日中社会をやり、我々もおもしろおかしくその話を聞いたり、図画の時間には戸外に出て写生をしたり、よい天気の日は授業を止め先生と共に裏山にでかけ、歌をうたったり、先生の詩の朗読に耳を傾けたりして、弁当を開いたものだ。先にどん馬の話が出たので馬に関する思い出を続けると、当時我々の地方にも馬はかなりいたのだが今ではほとんど見られなくなった。木を運ぶ馬車にゆられての学校帰りは遠い昔の話の中のこととなってしまった。我々はあの馬のひづめの音をまね、カンヅメのカンを利用してそれに鋼

をつけてその上に乗り「パカ」「パカ」とやっては得意になっていた。さらに「竹馬」も遊び道具の一つで二本以上のところに台をつけてそれを乗りまわす者もいた。私はどうしても自分で最も安定していると確信が持てるものでなければ進んでやる気はしなかった。体育の時間には飛び箱、鉄棒、マット運動、ドッチボール、ハンドボール、騎馬戦など主で相撲もその頃私達の力を競い合う場でもあった。天神様の境内では毎年子供相撲があり賞をもらった事を覚えている。相撲のことが思い出されたので、これに関する記憶をたどると、この頃「親指相撲」といって手を握り合って相手の親指を抑え伏せた方が勝という遊びや、野原にては大ばこの蓋で引っぱり相撲をとったりした。又この頃の関取りには吉葉山、鏡里、東富士、千代ノ山、大内山などがいて、これらの名をつけた力士の紙人形を作り、尾をつけて立てては箱の上に両者を並べ、手で箱を打ってとっくみ合いをさせ、夏場所、本場所などと番付けを作っては壁にはったものだ。今の小学生はこんな遊びを知っているだろうか。けんかも好きな方ではなかったがよくやり、負けて泣いて帰ると母に「大きな体をしてケンカに負けて泣くなんて男の子じゃありませんッ」と云われてクシュンとしたこともあった。私の最も苦手とする体操種目はマット運動や飛び箱、鉄棒などの機械体操であの宙返りや水平両脚飛びなど夕方遅くまで学校に居残って練習し、やっとできるようになったものだが今では宙返りなどできるだろうか。やってみた事もマその必要もなくなった。小学校時代の思い出で特に記さねばならないのは学芸会である。三月頃放課後台本の暗記や舞台装置の準備で小さいながらも張り切っていた事だろう。私は一年生の時劇「花さかじいさん」の殿様の役をやり、はかまをはき金属製の刀をさし毛糸で作ったちょんまげを頭にのせ下座を連れ、花さかじいさんが桜の木の上から作る紙吹雪の中を「アッパレジヤ」とやった記憶は今なお私をはなさない。あの頃の授業ものんびりしたもので社会科で太古の人間社会の事を習うと先生共々その住居を学校の裏庭に造り、その中で火をたいては太古の生活を体で体得しようとした。私も藁やむしろで家の前の畑に古代の住居を作ったり、木の上にニューギニアの樹上住居を思わせるものを作り縄ばしごをたらしてそこより出入し、友達と日がくれて母が呼びにくるまで話をしたものだがどんな話をしていたのだろうか。又山を部下をつれて探険し、洞窟を見つけてはたいまつを手に探険家気分を満喫していたのもこの頃だったろう。透明のビンに土をつめてアリの巣を観察したのも、日光写真がはやったのも、自分で作った天体望遠鏡で月をながめたのもすべてこの頃だったろう。水アメをしゃぶりながら紙芝居を見て、十年後の自分などの様に想像し

て、そことだろうか。これも得意でこん身方紙、ヨツトなどをつくり、その速さを競い合ったものだ。時間のたつのも忘れて模型飛行機造りに夢中になった。模型飛行機では滞空時間を競う大会があり先生に連れられて県大会まで行き雨の中を三分ばかり飛ばして五位になった。あの雨で翼に穴があいて浮力をなくした我が愛機が舞い降りてきたときのくやしさは今なお本当に記憶している。村祭りで売っているたこの風船の糸についているあの長細い風船を自転車の車輪とフレエムの間にはさみ「パレ」「パレ」とオートバイの音をたてて自転車を乗り回したのも我々子供の創意に富むものと思っている。愛犬小僧であった私は学校でも家でもよくしかられた。寒い講堂の板間に何時間も正座させられたことや、・放り出されて鶏小屋の上で涙を流しながら寝ようとむしろの中に入った思い出も、楽しい思い出と共にくっきりよみがえってくる。

季節によっても遊びの種を異にした。春には小川でメダカ取りをやり、笹舟を浮かべてそれをどこまでもおっかけたりした。夏は我々の天国であった。水泳、魚とり、魚釣りと共にセミ取り、など家に居ることはまるでなかった。あの頃「もんどり」といってガラス製の魚捕獲ビンを夕方川に仕かけておいて翌朝起きるやすぐに現にでかけたものだ。又今でも家にある父の大きな麦わら帽子に顔をうずめて一日中池に糸をたらしていたこともあった。笹でまるく輪を作りそれを竹の端につけ、そこにくもの巣をいっぱいつけそれでセミを取ったものだ。よく考えたものだ。昆虫採集は夏休みの宿題であったと思う。楽しい夏が過ぎると収穫の秋である。私の親類は農家であったので稲刈り、もみ干し、わら積みなど手伝もよくすると共に、そのそばでバッタやメーゴやトンボを取った。又落穂を利用してスズメ取りもやった。これは地表に小さな穴を掘り、笹で組んだすだれをその上に立てかけその落穂をスズメが取りに入るとバタリとすだれが落ちてスズメが逃げられない仕方であった。冬は家に居る時間も長く、こたつにあたっては「漫画王」「おもしろブック」「少年」「少年画報」など現在の大学生の教養書を読んだ。今でも赤胴鈴之助、ターザン君、タルマ君が私の中に生きている。戸外では雪だるまを作ったり、雪合戦をやったり、みかん箱に竹のそりをつけ、そり遊びもし、自分でスキーも作った。又母は雪と卵とでアイスクリームを作るのが得意であった。思えば近頃はすっかり雪が少くなったようである。田や池にはりつめた氷を利用してスケートも楽しみの一つであった。なおも思い出は尽きないが遊びを主としてここに表わし、その他の思い出は自分だけのものとしてそっとしておきたい。友とこれら幼年時代の遊びについて話し合ってみるとだれしもが

で　遊びをやっていたことを知り、マスメディアの発達していないあの頃になって、場所を越えた遊びの同時性にいささか不思議な感がした。これらなつかしい想いからふと現在の子供達に目を移して見ると今の子供たちがいかに遊びを知らなすぎ、遊びの楽しさを味わっていないことかと感じ、彼らをとりまく時代性に同情の念を持った。「子供の文化」は子供が遊びの中で創造するものであって大人が与えるものでないと思われるのである。主体性を逸した子供に残された夢の世界はどこに立脚すればよいのか。これでは子供が私たちの年代になったときその幼年時代の思い出に何をなつかしがることだろう。どこに安らぎの泉を求めればよいのだろうか。このことは現代人が大いに注意すべきことであって、誰でもすべてその個人の歴史というものがあり、その歴史は必ず記憶という形で後の世でよみがえる。その時自分たちの各時代に、自分たちで作った文化を持たなかったということはどれ程さみしいことだろうか。人間は一人になったとき、さみしくなればなにかに自分を埋没させたい衝動にかられるものです。そのとき母の様に温かく自分を抱き、なぐさめてくれるものは幼年時代の思い出であると思われます。詩人というものは必ず幼時を思い出すものであるとどこかで読んだことがあるが、まさしく幼時の思い出は自分の経験した詩の世界であります。その世界に今一度自分の足で立ったとき芭蕉の有名な言葉「不易流行」を全身で感ずることでしょう。

潘阜（中）

3回生　田中　充

三元宗の八年、即ち西紀1269年の正月晦日、高麗が国費の大半を費し、その運命をも賭けた、赫徳等の遣日使の一行は、意を果さずして再び江都へ帰着した。対馬島と相呼応する巨済島の松豆浦に至り、風濤　天を蹴るのを見て、海船の危険を感じ、ひき返した。とのことであった。

急遽高麗では、この予想しなかった事態に対する策を論ずべく　評定がとり行われた。

江都の君臣の間には、曩々たる論議が巻き起った。然し、結局の所、大半の重臣達の考えは、世祖フビライの思惑は如何であるか最怖していることに帰着する。

雖然して、日本へ行き着けなかったのでと云うのであれば、申し開きは、立派るが風濤険難の故を以つて引き返したとなると、高麗が蒙使の導達する責を負わされていた以上、日本へ嚮導し得なかった今度の事態は、どう考えてみても高麗の越度になるのではないか。詔の語句が烈しいものであっただけに、前詮責任追求を免れることは出来ないのではないか、という考え方であった。

重臣達の青ざめた顔色を伺いながら、それまで一座の仲間入りをせず、ひとり、口を緘していた李蔵用は、何かを言いかけ様として、再び口を閉じた。

彼の考え方は、皆のそれとは少し違っていた。確かに、皆の考えの通り、蒙国日本への使者の嚮導役としての高麗の使命は果せなかった。そして又、世祖の怒りが一体どの様な形を以って高麗へ報復されるか、それも確かに、皆の言う様に恐怖はあった。が、然し、今ここで、遣日使の一行が、無事、日本へ行い得たと仮定して、果して事態は、それで済んでいたであろうか。且って、王宮の評定で、日本が従順な態度をとって呉れることを願うのみしか、高麗を救う術は何もないと、あの若者は言った。そして、それは全く願うだけの話であって、何の頼りもないのではないか。――宋正使たる赫徳は元も事も　副使として従って来た殷弘の、あの高踏的な他人をさげすんだ不遜な風貌を思い出して、李蔵用は思わず唇をくもらせた。

モンゴル元大帝は、自国高麗にとっては、この上もなき大国である。それに　高麗三十有余年の歴史が物語っている。然し、四海の要塞に守られ、且

って外敵の怖れを、あづかり知らぬ日本が、果してあの蒙弘の不快な態度で名ばかりの通商政策を迫られ、日本国は元大帝の強大さを、その背後に見ることが出来るであろうか。

李蔵用は、かぶりを振った。如何に良き結果を希もうとしても、脳裡には蒙使と日本国の重臣達のドス黒い干戈の響しか浮かんではこなかった。彼は、そう考えれば考える程、遣日使の一行が、意を果さずして江都へ帰りついたことが何ものにも替え難い朗報と考えずにはおれなかった。

高使からの使者は蒙使の道連役に過ぎず、そこには当然蒙使二人の意図が大きく物を言っていると考えるべきであり、又、世祖への言い訳も充分に成立つのではないか。一歩譲って、悪くしても、高麗からの直接の嚮導役たる宋君斐と金贊、両名の首をはねて、世祖フビライの前にさし出せば、こと足りるに違いない。二人の者は不憫であるが、日本が蒙使の意に背いた場合を考えれば、ものの比ではない。と、李蔵用は考えた。

ともかく、高麗の亡国の期は一時かせぐことが出来た。

高麗の危機に瀕したこの期に臨んで、その幕府の要職にある自分としては、国民に先んじて国政を憂い、自国が負わねばならぬ犠牲を最少限にくいとどめねばならぬ。

六十の齢を半ば過ぎたばかりの李蔵用であったが、その生命の大半を政の難局に削り取られていただけに、他人の目も痛ましい程老衰しきっていた。

事態は更に第二、第三を予想せねばならぬ。――李蔵用の思策は続いた。その解結する術を知らぬ冒々たる重臣達の論議が彼には妙な静寂となって、少しも気にならなくなっていた。――

モンゴルは大陸の帝国である。その広大な被征属国は全てアジアの大陸のもとにある。元大帝にとって日本への食指は海という城壁を乗り越えてのその最初のものではないか。ここに高麗が採らねばならぬ今度の運命に救われる道があるのではないか。彼は眼を閉じながら　その思策に誤りのない様、はやる期待を制えながら　殊更ゆっくりと、道をさがして行った。

大陸の帝国である元は海戦の怖ろしさを知らぬ。と、同時に、もって行き方次第で、その怖さを誇大評価させうる期待もあるのでないか。

その期は風濤天を蹴るを観て巨済島からひき返した二度の失態に熟している。高麗としては　この願ってもない幸運を、その前髪で掴んで、世祖フビライに　如何に海路の至難なることかを吹き込まねばならぬ。さすれば――日本への食指を世祖は拱ねてくれるかも知れぬ。李蔵用はそう考えて、自分の安易な期待をすぐに打ち消した。アジア全土にわたってその傘下に収め尽

した元大帝が、日本へ食指を今ここで伸ばそうとしているのは、単なる…へだけの征服欲だけのものではないことを彼は知っていたからである。

李蔵用の思策は再びもとへ戻って、最も期待出来るケースを考えた。…へ海航の危険性を充分に説けば —— フビライの狡猾さから考えて、あえて生命の危険を冒さねばならぬ遣日使を蒙古から再び選出する様なことはないのではないか。改めて高麗に単独交渉の形で、その責を負わせることになるのではないか。李相蔵用は、これは充二分に可能性があり、そして又、これは自国にとって最後の希みであって、これだけは己の命をもってしても成しとげねばならぬと考えた。遣日使の件が高麗だけの単独交渉となれば、高麗の採るべき道は、以前の様にただひたすらに倭国日本の順なる態度を期すだけのあいまいなものだけではなくなってくるのではないか！ まだ明然とした輪郭となっては、考えられなかったが李宰相には 一条の陽光がそこにあるのではないかと、模策した。

李蔵用は王宮を退がると 氷雨の落ちる中を徒歩で林徳、般弘の宿泊する麗塔館へと向った。今年六十六才になる宰相はこの二三年ひどく気難しくなっており、王宮の大手門の所に公用の輿と馬との二つの乗りものが用意されてあったが、彼はその何れをも用いなかった。歩いてもさして遠い距離でなかったし、又、彼には考えておかねばならぬことがあった。

彼は従者を三人随えて、泥濘の道を一歩一歩拾いながら歩いて行った。路上で行き交う男女は、李宰相と知ってか知らずでか、皆足許が少し危く見える気難しそうな老人に道を譲っていた。李蔵用は、併し、道がぬかるんでいることは、いささかも苦にはしていなかった。泥濘の中に足を停めることはあったが、彼は全く他のことに頭を占められていた。

彼は王宮の評正所から何度も繰り返していた様に再び幾十人もの姿を思い浮べていた。その中には、第一回の遣日使の一行に加わった枢密院副使宋君奭も侍御史金賢も勿論含まれていた。然し乍ら 李蔵用の追い求めている顔はそこにはなかった。

元宗の八年二月の望日、李蔵用は、元宗以下王宮の重臣達の悉くの反対をおしきって林徳、般弘等と共に世祖フビライのもとに、自からの入朝を決意した。老衰と多年に亘る蒙古軍との抗争に依る心労のため、その健康状態は入朝の過程においてすら不可能ではないかと他の者は危ぶかったが、彼は厳としてきき入れず、江華島を出発した。彼は出発に当って 元宗に向って次の様に語った。

駿馬も老いては駑馬となるたとえ通り、自分も亘っての如く高麗を守って

いくかは、もう既に有りません。しかし、今度の入朝が一体どの様な意味を持っているか、誰よりも良く知っている自分としては、どうしても他の者にその役を任せる気にはならないのです。陛下は国元にあって、この老耄がどうか、高麗に朗報をもたらすことが出来る様、願っていて欲しい。自分としては、これが最後の仕事のつもりで、生命を賭けるつもりである。若しも、幸いにして、高麗の単独交渉の形で遣日使が行われることが、世祖から許されたなら、今の自分としては モンゴルで客死しても満足である。と。

この年の八月、李蔵用が待ちに待った世祖からの返信が来た。

李蔵用は、世祖との会見の初、フビライからの即答を期待したが、それはなかった。彼は傷心を抱きながら、江都に帰着し、世祖の意見書を待っていたのである。その間の数ケ月、彼には一日たりとも尊日というものがなかった。そして、今、ここに、世祖フビライからの詔の封書を持ちながら、彼は自分の魂の震えを抑えることが出来なかった。

―― サキニ使ヲ遣ワシテ日本ヲ招撫スルコトソノ嚮導ヲ卿ニ委ネタリ。意ワザリキ卿辞ヲ以テ解ト為シ、遂ニ徒ラニ還ラシメントハ。意ウニ日本ト通交セバ則チ必ズ蓋ク爾ガ国ノ虚実ヲ知ラン。故ニ托スルニ他辞ヲ以テセシナラン。然レドモ爾ガ国人ノ京師ニ居ル者少カラズ。卿ガ計モ亦疎ナリ。且ツ天命ハ詐トシ難ク、人道ハ誠ヲ貴ブ。卿ハ先後言ヲ含ムコト多シ。宜シク自ラ省ミルベシ。今日本ノ事ハ一ニ卿ニ委ス。卿ソレ朕ガコノ意ヲ体シテ日本ニ通諭シ、必ズ要領ヲ得ルヲ以テ期ト為セ。卿嘗ツテ言エル有リ ―― 聖恩ハ天ヨリ大ナリ。誓ッテ報效セント欲ス。ト。コレ報効ニ非ズシテ何ゾ。

李蔵用は、何度も何度も繰り返し詔を読んでも飽きることを知らなかった。それは明らかに、自分が奏上した意見の飾辞は責めてあったが、高麗に日本との単独交渉の責を負わせて来たものには間違いはなかった。

李蔵用は、一応の帰奮がおさまると、その青天白日の前に一塊の黒雲が襲っているのに気が付いた。それは、はるか以前から予想していたものであったが、明然と単独交渉の責が負わされる決定を見て、次第に大きく高麗の空に襲ってくるのを意識した。

彼は不安におののき出している自分を知ってあわて出した。これは耳ってから脳裡から離れなかったことであり、完全に計画の中に組まれていたのだと、自身に言いきかせながらも、その暗雲は次第に大きさを増して彼をおおいかぶさってきた。

詔が来た以上、事態は可成逼迫している。急挙、事を運ばねばならぬ。さして、それは、誰が！ ――

李蔵用はあらかじめ自分の迂闊さに怖れた。今まで、使者の人選は、
は何百回となく繰り返していた。にも拘らず、その使者たる者が一体誰へ
るかを決しかねていたのである。

李蔵用は　元に入朝する以前から遣日使が高麗の単独交渉となることを
も、はるかにその時の使者の人選が容易でないことを知っていながら、時が
前後するだけの理由で明然り決定していなかった自分に唖然となった。政局
に可どる者は勿論のこと、禁内、禁外の両学館に学ぶ英才を悉く調べ尽して
そこに、使者たる条件を備え、自分の意に添う者が誰一人としていなかった
ことを知りながら、今の今まで其れ程気に懸けていなかった。

李蔵用はあせり出していた。あまり期待を持てぬと知りながらも、朝廷に
おいて直ちに宰相会議を開き、使者の人選を行わせた。

議会での論議は李蔵用がおそれていた如く、今度の詔の解釈と、それに対
する世宗フビライへの非難から始った。李蔵用は又しても、気難しそうに口
を緘さずにはおれなかった。常のことながら、王宮での評定では二つのタイ
プに分れる。その一つは、李蔵用と全く堅く口を閉ざし自分だけの思考の中
に耽けてしまうものと、しきりと意見を述べ様とするものである。

確かに吐れた意見は全て無意味なものばかりではなかったが、その大半は、
破壊し非難することはあっても、建設的な、又具体的にどうだという意見は
常に極めて少い。李蔵用は、そんな意見を耳にする時　必ずというくらい、
深く肯首する。口にされた意見は常に知性に長けた洞察のいきとどいたもの
であったからだ。然し、彼にとっては、その様な文人の論理のこね廻しは、
議題を紛糾させるなにものでもなかった。

李蔵用は、大きく期待の裏切られたことを知りながら、評定の半ばにして
その座をしりぞかねばならなかった。

国費は今既に涸渇している。国民は最早疲弊の極にある。草木の類は勿論
のこと、中には土や泥を食してその飢を忍んでいる者もある。この国民の最
後の一滴の血をも搾取して、今一度日本への使者の調度を整えさせるのであ
れば、その使者たる者は、如何なる手段を以つていても、高麗へ朗報を齎ら
せねばならぬ。高麗にとって、その使者はまさしく、最後の一条の蜘蛛の糸
であり、その生命の糸が切れた時は、最早高麗国の存在は考えられぬ。李蔵
用は解りきった事だと知りながらも、今又繰返していた。されはこそ、その
使者を選び誤まる様なことはあってはならぬ、と。朦朧としてくる己の思考
力に鞭打った。併し、その重命の使者は、李蔵用の想いも依らぬ所から、そ
の姿を現わしたのである。

閑談の閑談

C2 平岡文二

人の世の道はあやなし、わけがたし、
　　残す業にあやまちなかれ。

とはいうものの、書物の中には、文章がまずい、記述が当を得ていない、又は批判が適正を欠いているetc.のようなものから、本人はそういう気がなくても、原典が間違っている場合（盗用）まで種々あると思われる。

最近読んだものにこういうのがあった。

〔CMタイム〕

Can you count? ----- If John should give you ten apples, and Mary should give you six. Can you tell me how many you would then have? -----

「汝は物を数え得るや。もし父がリンゴを11与え、母が汝にリンゴを5つ与えうるときには、幾つのリンゴを得るや----」

文部省編「小学読本」訳。（明治6年）

尚、原文は福沢諭吉が購入したWilson Readerより採取。文部省の創意工夫(?)に御注目されたし。（下線部のみならず）今は90年のむかし話。〔文部省提供〕

では続けてごゆっくりお読み下さい。

十九世紀の詩人としても批評家としても、英国の文学史上重きをなすといわれるSamuel Taylor Coleridge（1772～1834）についての話だが、彼は英国の批評にはじめて哲学的基礎を与えた。最も深遠な批評家といわれている。しかし、彼の文学論や芸術論のどこまでがoriginalなもので、他からの無断借用が果してどの程度のものであるかについては、已に生前から問題化されたところである。

①〔Spot C.M〕　休講になると人影が急にまばらになるのは何故だろう！（もう少し不活性でもいいのにネ）〔生活指導部〕

時は1811年12月末、場所はLondonでShakespeareに関する講演を行っていたときのこと。彼がRomeo and Julietを論じるや否や、一人のドイツ人が前に現われて次のように言ったらしい。

「かりに、この様なことがあり得るとすれば、貴方はSchlegel（Silica-gel

じゃないよ）がViennaでこの劇について行った講演をお聴きになったか、又はお読みになったのではないかと私は信ぜざるを得ません。それ程、貴方の理論、考え方、いや引用例まで、殆んど彼の話と同じなのです。ただ、彼の講演集は、私がドイツを出発する直前に出版されたばかりで、未だ一週間たつかたたないという程最近のことです。然も、現在、英国にある同書としてわずか二部に過ぎないと思います。一部は私の手許にあり、もう一部はNew Bond StreetのBoosey氏の店にあります。」（その店が現存するかどうかは未詳）（Schlegelの劇に関する講演は、1808年にViennaで行なわれ、講演集は1811年に出版された）

②〔Spot C.M.〕図書館で借し出し用紙を10枚程出しても、よくて本が1～2冊しかない。（借し出すと痛むもんな、キミ！）〔図書館提供〕

そこでColeridgeは答えた。「Schlegelのものは、昔我のスペイン劇の翻訳を原作と対照して見て、彼の趣味と天分とに感心したことがあるだけで、それ以外の彼の著作は読んだことがない」（以上和訳）

（しかし、Coleridgeは1811年の1月、已に友人Henry Crabb Robinsonを相手にSchlegelのギリシア劇について議論したり、又11月には同人にSchlegelの著作を読みたいと手紙で語っている）

要するに、彼は他人の言を無断で使用したのである。また、他には、ひどいことに彼は、Kantの頭脳まで無断借用していたetc.ということである。

〔CMフイム〕

"BG" means "Business Girl",
"OG" means "Office Girl",
"OL" means "Office Lady",
Then, what does BB mean?
It mean Beach Boy.

— B.B.（ベベ）—

〔斜陽の邦画会社提供〕

では続けてごゆっくり。

今度は、訳語の今昔について話してみましょう。

明治初年の英語教室では、dog「イヌ」、cat「ねこ」と教師につづいて訳語を生徒が唱和していって、butterとかcheeseなどのようなものになると、「日本にないもの」と先生が云うと、生徒もそのまま繰り返したそうである。この「日本にないもの」に訳語をつけるのが、所謂学者の苦心

する方でもこまらしい。例えば、諭吉は、物の表裏なことを表わすのに、原文では「バターの如し」とあるのを「味噌の如し」と翻訳したとある。又、他には *bread* を「蒸餅」、*biscuit* を「乾タル餅ノ一種」である。

〔*Spot* C.M〕寮生の食事と一般学生のそれとの差の余りにもひどい事。
（寮生の方がよく食べて、よく勉強するから!?）
〔生協食堂部〕

③〔*Spot* C.M〕以下少しばかり面白そうな訳語を並べてみると、

Commons：諸尼利亜ノ大評定ニ次ク評定所。

vote：発言（会議ノ方ナトニテ各ノ見込ヲ発言ス其説ノ多キ方ニ隨テ可否ヲ決スルナリ。

candidate：役儀杯ヲ希フ人。

committee：吟味事杯アリテ命セラレタル評定衆。

jury：事ノ吟味ノ為ニ撰ばれシタル役人。

封建制度の徳川時代には、これらの言葉に対する相当語がなかった!?「英和字彙」には、一応の訳語があった。（明治六年）それぞれ、「下院」、「投票（イレフダ）」、「仕官ヲ望ム人、候欠」、「斡事（セワヤク）」、「陪審官（タチアヒシウ）」となっている。

又、諭吉は「演説」（*speech*）、「討論」（*debate*）、「版権」（*copy-right*）「競走」（*competition*）等の訳語を作った。*post-office* を「飛脚場」、*book-keeping* を「帳合之法」としたのも彼である。*book-keeping*「簿記」は音が似ていて面白い。他にも *geometry* の「幾何学」は *made in China* で、幾何は中国語ではチーポー、つまりヂェオーの音訳になっている。（そうだ）

永年の鎖国の結果当然のことながら、外交関係の言葉の訳語にも苦しんだ跡がある。

consul：他国ニ於テ我国ノ商売ヲ掛ク役人。

diplomatics：古書ニ依テ全権ノ役ノ勤方ヲ吟味スル学術。

diplomatist：同上ニ熟シタル人。

こんな訳で果して理解出来るものだろうか。通訳とは六ケ敷しいものである。*gentleman* なんかも「歴々ノ人、重々シキ人」、「縉紳、相公、大人、先生」がある。

④〔*Spot* C.M.〕繊維学部の中に三階の建物があった!!（暇と金のないシト捜してごらん）〔ケムリ製造人両提供〕

最後に、もう二、三の単語を変遷をたどって並べてみよう。

citizen：素性正シキ都市ノ人，→府民　自由ノ民人、住民、→市民。

democracy：共和政治　→民主政体、民主政治，

socialism：社会論、交際の種、共産論、→　社会主義，

〔CMタイム〕

*Shakespere*の研究？　シェー!!　全くシェーもんザンス。
そこでミーは彼のシェンモノ的なことを学ぶ為に
おフランスへ行くザンス。シェーっとネ！

——イヤミ——

チビ太、デカパンおじさん、——マツヘ

（少年サンデー提供）

毎度、御視聴有難う御座居ます。一服やりながらもう少し読んで下さる！

*Shakespere*のことはMr.イヤミに任せて、ミーは他のことを研究してみたザンス。日本語の発音の中にはない音"ヴ"である。ある文化人はこういっている。

「美神のヴィーナスにしてもビーナスとなっては、ナスとキウリの一種みたいであり、ビーナツツやビーマンの類を連想させられて、うんざりする。（中略）バイキング料理というのが流行しているが、海賊のこのヴァイキングをバイキングと書くと、いかにもバイキンがいっぱいついているタナざらしの料理みたいである。どうして"ヴ"を廃止したのか、承服し難い」

"ヴ"という文字を創案したのは福沢諭吉で*1860*年に始めて使った。

他にも、ヴァ、ヴェ、ヴ、ヴェ、ヴォ　〔V〕
　　ファ、フェ、フ、フェ、フォ　〔f〕
　　ウァ、ウェ　—　ウェ、ウォ　〔W〕　がある。

一方、国語審議会が〔f〕、〔V〕を含む音節を『なるべく「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」「バ・ビ・ブ・ベ・ボ」と書く』と定めた理由はこうである。

1. 日本語の音韻として区別しないものは文字でも区別しない，
2. 二種の表記法が行われているものは、国民一般に行われ易いことを眼目として、なるべく平易なるほうを採る。

⑤〔*Spot* CM.〕女の奴って、どうしてあんなに横柄な態度で腰を掛けるのか？　（だから"女"なんだろう）（フェミニス協会提供）

しかし、例外として「ファイン・プレー」、「フェミニスト」、「ヴェール」、「ヴォキャビュラリー」*etc.*を認めている。そして国民一般はそれをどう利

用したか？　この例を見れば一目瞭然である。「テレビ」、「ビタミン」etc. である。これならば、発音に区別がないのだから、原語の *spelling* に迷わされることはない。大衆は一もニもなく平易主義を支持したのである。これは日本の文化発展の為の非常な促進剤だろう。

そこで、"*fry*" と "*fly*" なんかはどうしようてなことは全然考える必要なんかも当然なくなる訳だ。

どうしても区別したい人々には「*television*〔テリヴィジァン〕テレビ」と書くのはどうだろう。

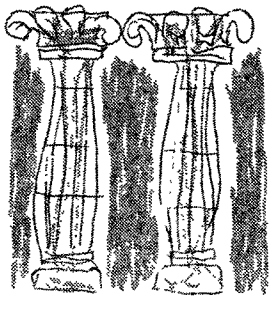
〔C.M.タイム〕

I asked the children if the expression "Life begins at 40" were true. A little lad said, "Life begins at 3 for me."

How is that?

"Well, 3's when school let's me out."

〔英語研究室提供〕



西山

1回生　返見俊雄

京の西山へ行く事になったのは、その日の昼前、友人がさそってきたからだ。日曜で暖で天気も良かったので一緒に行く事にした。

東向日町から小塩までバスに乗り、それから歩いて善峰山、ボンボン山へ行くハイキングコースだ。小塩についたのは一時過ぎで　すでに下山してくる人がかなりいた。バスから降りるとすぐ急な坂が続く。20分ぐらい歩いていくと、西山が目前に迫り、白い雲が悠々と流れていて　青い空とすばらしい対象をなし、これからのハイキングを迎えてくれているようだ。ここからはすでに善峰寺（よしみねでら）が城のように山腹にっきでて見える。杉の木が道の両側にぼんぼん立ち、神聖な荘厳な感じの寺を思わせる。山腹に沈足した急な坂を登りきると、寺の山門に至る。色のさえない山門をくぐっていくと、緑青色のにぶい色を放っている青銅の古風な灯籠が趣きなく道の真中にっったっている。いかにもこの灯籠を強調したいかのような、不自然な感じがした。常に灯籠というものを通りの端で見ている為かもしれない。さらに段階を登っていくと、左側に善峰寺ならカリン、カリンなら善峰山と呼ばれるくらい有名なカリンの大樹がある。これはさるすべりの木とよく似ているもので、支那原産のバラ科の落葉樹だそうだ。見た事のある木だなあと思えば、繊維学部の正門の東の方にある木がたしかこれと同じだ。なんだそれじゃあちっとも珍らしくないじゃないかと言いたい所。この実は砂糖漬にして食べると薬になるそうだ。建立したのは源算上人で、彼は一一七才まで生きていたというからたいしたものだ。カリンの実をカリッカリン食べて長生したのかもしれない。もう一つ段々を登ると、段々に化石がついているという事だが、これはたいしたものではなかった。この寺で最も有名なのは「遊龍の松」と言われる恐ろしい松の木。高さ二メートル。北と西にそれぞれ二十メートルぐらいにのびる松で、その見事な枝振りには感心させられる。天然記念物だそうだ。しかもあれだけの松にしようとするには相当の手数がいるにちがいない。僕に言わせれば、人工記念物だ。それにしても「遊龍の松」というのはちょいとオーバーかもしれない。この寺から東をのぞむと、左方に京の大部分が、右方に摂津、河内、山城が見える。壮観かな、絶景かなと言った所。世にも誉れなる無料展望台だ。

善峰寺から出て、まず目につくのは荒れた竹林だ。これは長岡からつづく西山一帯の特産。竹の関係だろうか、この辺は地質が良くないために、竹がうまく育たなかったのだろう。20分も歩いたろうか、部落が五、六戸立っている。山と山の間にはさまれたわずかに平坦になった場所を田、畑にして生活しているのだろう。その部落そいにそった道を通り、これから尾根に沿って急な坂を登っていく。二時二十分だった。

ハアハアと息をきらして、急な坂を体をたおすようにして登っていった。細い道で一人が通るのに精一杯で、服に植物の実がいっぱいくっついてしまって弱った。そこへ下山してくるグループがあった。僕達は道を譲ったが、本当は下山してくるものが道を譲るのがたてまえとなっている。この急な坂はそう長くはあるまいと予測していたが、なかなかどうして長い。いや苦しいために長く感じられたのかもしれない。後25分。ポンポン山へは三時に着く予定をしていたので、少し焦りが出てきた。しかし心は焦るが、足がいうことをきかないから困った。「ここで休んでから---」とも思ったが、後で又疲れが出てきてはいけないし、予定も狂うので、我慢して登った。あれから十分たって、ようやく坂はゆるやかになった。後15分。ピッチをあげた。尾根づたいに歩くのは全く悪くない。左右がまる見えで、太陽をいっぱいに受けて、歩いていても気持が良い。この爽快さで今までの疲れもふっとんでしまった。今はひたすら頂上に向うのである。

焦りすぎたためか、三時前についた。まずどかっと座り、早速持ってきたお茶とパンで腹を満足させた。こんな時はどんな粗末なものでもおいしく、楽しく食べられるのだから不思議だ。頂上へ着いた時の喜びの力だろうか。今日は天気が良いので、ずっと遠くのほうまではっきり見える。西の方は亀岡、福知山方面の山々が波のように重なっている。北西には盆地、北は小塩山、愛宕山、北東は京都市の大部分がくっきりと全体としては白っぽいベールのような感じに見える。京都タワーとかスタンクが特にきわだって、白いベールにポイントをおいているのが印象的だ。東は東山、宇治川が一望のもとで、近くには淀川、名神高速道路が美しい。新幹線の列車が小さいむかでのように走っている。雄大な展望だ。ポンポン山の山頂を歩くと足元からポンポンと音がするような感じなので名付けられたそうだ。実際歩くと、成る程とうなずける。

山　青　で

山の頂きに憩いを求む
木々のこずえに、そよ風の気配なし
歌う小鳥もなし
ただ沈黙を保つ
ただ憩いを求む。

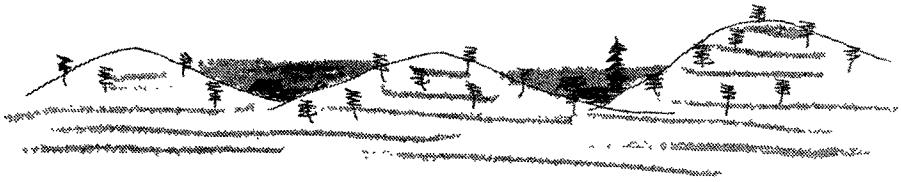
君　と　父

生まれた時から君は親友
君は私に勇気と希望を与えてくれる。
世の中がいやになった時にはなぐさめもしてくれる。
私にファイトを与えてくれる
やっぱり君は私の友だ。

君にも私にも
すばらしい父がいる。
天地創造の永遠の力を持って
永劫の大法則をもって
私達を創ってくれた。

西山は私に何か不思議な力を与えてくれる。西山に限らず、山に登る事が、私達に不思議な力を与えるのかもしれない。

西山の素内ばかりになって、どうもどうも。



卒論について

高分子講座

大学の教育は人間形成にある。優れた技術者になる前にまず立派な人間に成らなければならない。四回生は長い学生生活の最後の年で、いわば仕上げの時期に当る。豊かな教養と優れた学問技術を身につけた社会人として世に出る直前の大切な年である。この時に卒業論文研究に従事することは非常に重要な意義をもつものである。与えられた問題に対して、正しく理解し、適切な判断を下し、勇気をもって解決に向う態度を養うのに絶対の機会が得られるからである。受身でなく、自からの努力で研究を進めなければならない。

教官の側から見れば、各学生の個性を見きわめ、それぞれの有する能力を見出し、その可能性を最大限に延ばす努力を行うわけである。そのためには学生と教官の密接な接触が絶えず行われなければならず、個人教育の場ともなる。それで現在の教室員や設備からは一講座に十名ほどがまず限度ではないかと思われる。六、七名が適当。

卒論研究は教育の一環であるから、研究を通じて人間形成を行うもので、それで研究に努力することに意義があるわけである。よい結果だけが目的ではない。しかし一心に研究すれば必らずよい結果が得られていることは今までの経験から認められる。楽しいかんい気で愉快な研究生活が過せるように、教官も学生も努力する必要がある。各講座にはそれぞれそこの研究テーマがある。三回生の時の実験で大体窺われるであろうから、自分の性質などを考えて所属を考えればよろしい。

高分子化学講座では、主として高分子合成と高分子反応の研究テーマが与えられる。前者は各種のラジカルおよびイオン共重合、開環重合、テロメル化などで、後者はグラフト重合や高分子置換反応である。理論的に研究するのが目的であるが、生成物はたとえば、接着剤、分散凝集剤、ノリ剤、界面活性剤、サイズ剤などに利用されている。実験の好きな努力家が望まれる。少数精鋭主義。

実習体験の記

水渡研究室

高槻の駅から五分足らず、表門の庭のきれいに整えられた緑の芝生と、真夏の太陽に向って伸々と美しく咲き揃った色とりどりの花々が、印象的な京大化学研究所の本館の二階が私達の目的とする水渡研究室でした。ここで七月十二日から三十一日までの二十日間、西岡君は電子顕微鏡の薄片結晶の試料作り、その観察、電顕写真、X線分析等についての実験をし、一方私は荒川先生のもとで"ガスクロマトグラフィーを利用した粉体比表面積測定装置ADS-1A"を使用してカーボンブラックや土clay等々の吸着比表面積に関する実験を行いました。

毎朝、通勤ラッシュの終った頃に阪急に飛び乗り、先生よりもほんの数分早く部屋の鍵を開ける様に心掛け、昼食時には高槻駅前の食堂をあっちこっちと食べ歩き、食後には涼しさを求めて完全冷房の電子顕微鏡の部屋を訪れ、夕方五時近くともなるとラッシュの一足先に実験に切りをつけて帰途に着くという暑い日々でのんびりした日課でしたが、実験は大変興味あるもので多くの事が学べたと思います。少しでも良い実験値が得られる様に文献を開いたり、自己流の実験法を考えたり、大いに楽しみました。又、始めて見る電子顕微鏡で PbI_2 の積層欠陥や格子欠陥による転位やその移動等が観察できた時、今まで考えもしなかった二万分の一位のミクロの世界の挙動に驚ろき、その偉大さに感激しました。

実験はさておき、この研究室でのもう一つの収穫は素晴らしき男性と知り合いになれた事でした。自ら"セイロンのベンケーシー"と名のる医学者の卵の彼は、セイロンからの留学生ガメボーラ君でした。英仏独露は勿論の事、日本各地の方言に至るまで上手に使いこなし、(彼から鹿児島弁を教わったのは妙な具合でしたが)漢字でもすらすらと読む彼は、未来のセイロンを代表する秀才らしくその知識の豊富なのには驚ろかされました。当年とって26才ですでに数ケ国に留学し、京大の次はケンブリッヂ大学に留学することになっているとか、世界中の国々を勉強の足場にして心ゆくまで勉強してゆく彼が羨しくも感じられました。"中立国であるセイロンは平和な国で国費の大部分が教育方面に費され、先進国に負けない様に大きな力が掛けられており、日本の国ももっと学問研究方面に費用を惜しみなく使うべきだ"という事が

ら、日本社会の態度面　各政党に対する批評等まで私達日本人以上に日本の隅々まで細かい観察の目が行き届いているのに感ずる位でした。だが彼も他の外人と同様に"日本の風景は期待していた以上に素敵だし、日本人は親切だ"とのお言葉は忘れませんでした。彼のファイトある学生生活の話を聞いていると、ぼんやりと四年間を過してしまいそうな私にとって大いに反省のチャンスを与えてくれました。

緊張した面持ちで西岡君と二人で水渡研のドアをノックしてから二十日間の実習はまだまだピリオドを打ち難く感ぜられましたが、これからの一ケ月半の夏休みの魅力の方が大きく、水渡先生を始め、お世話になった研究室の方々にお礼をのべ、化研を後にしました。

稲垣研究室

高分子物性研究室

化研の裏口から入ると、すぐ右側にいかにも老朽な建物が目につく。その二階の一隅が、この研究室だ。実はこの他にも二ケ所ほどあるが、その室の事はのちほどにして、今はこの二階の研究室をのぞいてみよう。ここは高分子の物性研究室で、稲垣教授、小高助教授以下四人の研究生がいるが、皆若い人達ばかりでムード満点。朝は十時に出ていくので　全く重役気分で、お茶もコーヒーもジュースもあり、全くリラックスな研究室で、稲垣先生は身長こそ低いが可成りのファイトマンである。小高先生は、一見すると髪の毛がうすく、年の割にふけて見えるが、なんと年を聞いてびっくり、三十二才とか。今年の十月頃に結婚されたそうだ。先生は大のクラシック音楽ファンで、レコードも百枚以上も持っておられるが　さらにおどろいた事には、マンガが大好きとか。これは、化研全体に通じていえる事らしい。むずかしい専門書の横にマンガが置いてあるのは、何ともいえないコントラストである。さて　私達三名が、この研究室で約二十日間実習をしたが　その時の実験内容は、次の通りである。MMAとSt の共重合とMPAとStの共重合を行い、これについての誘導期間、粘度、赤外線吸収によるラジカルの確認などで、先生を始め研究生の人達が親切に指導して下さったので、実験に対するファイトも助長して私達三人は実に有意義な実習生活を送った様に思う。特にこの実習で感じ取った事は、実験をする前には必ず先々までの計画をたて、それに従って実験を進めていく事 —— 即ち実験計画法にそった実験がいかに

大切なを学び取る。さらに　特にこの研究室が微生物の伊弉室であるから、不純物を大変きらい　容器の洗浄は完全に行わなくてはならない。特に、乱などを行う時には、ごくわずかの目に見えないようなゴミにでも大きく影響されるから、細心の注意を払う必要があること。さらに、どうも若い人にありがちだが、何事をするに於ても決して、あわててはいけない事である。小高先生も口ぐせのように「あわてると事を仕損じる」とよく私達に教えて下さり、身をもって体験した。

以上のように、今まで学校で実験らしい実験をしていなかったので、不馴れな事も多かったが、一応これをきっかけにして、実験というものが自分達の身近かにやって来た様に思えた。

最後に、この文面をかりまして、稲垣先生、小高先生ほか七名の方々に、実習中の御指導を感謝いたします。

◀編集部員紹介▶

四回生　宮崎龍久、　鵜野高資
三回生　中村隆博、　伊藤　明、　西山昌男、
　　佐藤光則
二回生、　平岡文二、　小林新一
一回生、　上田　勇、　鎌倉伴和
顧　問、　金井政洋

原稿募集

内容形式・自由（毎し編集員が特にお願いすることがあります）
用　　紙・所定の原稿用紙（編集委員に貰って下さい。）

雑感的批判講座

朴念人

話家批判；

落語とは、特定の人間が、客観的に、複数の人物の性格付けをして、一定のスジのある話をする芸能である。落語にあって主要な事は、客観的現実を反映したスジがある事。そして、そのスジを登場人物が、現実に沿って一面を代表しつつ性格付けられ、話が進む点にある。落語家として、枢要な事は、話の理解であり　話の背景、即ち、客観的現実の捉え方、そして、それに基く人物描写を行う話術にある。

落語の小話には、中国の醒醒抄から出た物が多いと言うが、恐らく、その初期は、それらの小話を大道で庶民に聞かせ、何がしかの代償を受けたのであろう。江戸末期、町人文化の隆盛と共に、多くの、百にも登る寄席が設けられ、落語は、小話から、それを組合せ、連続させた今で言う落語に発展した。封建社会の内部的崩壊の稽花的現出としての、町人の勃興が、多くの作家をして、今に残る古典落語を作らしめた。その最大のものが三遊亭円朝である。こうして、落語は庶民の中から生誕した庶民の漫画であるべき性格を持　に至った。

元来、寄席の中でも地位の低かった落語は、戦後、マス・コミに合致して、以前よりもまして、広範囲の人々に受け入れられ、時代に即応する反面、時代から規制された、新作落語なる物が、それである。

新作落語の擁護者は、古典落語といわれるものも、それが出来た時には新作であったと反駁し、古典と新作を同格化しようとする。然し、古典が長い風雪に耐えた、庶民の真理であり、庶民の生活の本質であると言う事を、彼らは見誤っている。又、古典落語が、古い前近代の時代に生まれ、それが故に返って、純朴でいかにも人間的であるのに対し、いたずらに現代風を装おうとした点に、新作の欠陥がある。

そう言う意味で、既に、落語は江戸の遺産である。

併し、新作の中にも、古典と同様、庶民性を本質化したものもある。歌奴の「浸業中」とか、今輔のお婆さん物がそれである。併し、これも、歌奴やムダが演ずるから、落語として成立するのであって、普遍的ではない。

マス・コミの驚異的発達に伴い、マス・コミに乗ずる従業が出現した。

司会者、ボードビリアンとして、多くの話家が、金漁りに奔走している。これも、芸技が確固としていての上ならともかく、今だに、前座三年の段階にありながら、タレント不足を良い事に　適当にお茶を濁して、名を売ろうとする。立川談志の如きは、インテリ話家と名乗り、実存主義を理解するなんぞと吹聴する。話家は馬鹿であらねばならない。否、少くとも、馬鹿を装わねばならぬ。自己の聡明さは、話の中で存分に示せば良い。然るに、談志の時たま出す落語は、全く　面くに忍びず　語るに落ちる。談志が、飽くまで、今の芸人社会に反撥し、浅薄で偽善的な知性で押し切ろうとするなら、先ず、この社会を出て行け。そして、話家と名乗らず、語弁家として、先見のボヤけたプロデューサーと語らって、守銭奴の振舞を、心ゆくまで、胡麻化せば良い。

今日では、多かれ少なかれ、マス・コミに乗せぬ話家が居なくなったのかも知れぬ。マス・コミを利する知恵よりも、マス・コミに乗ずる知恵の方が安易なのであろう。人間五十年　天外に比べ、夢幻の如き人生を、総て投じても尚、測り知れぬ深淵を極めようとするなぞは、今の時代では　滑稽なのであろうか。ともあれ、今の話家は、安直に芸を売りすぎる。その最たる者が林家三平である。彼は、あの特異な容貌をすら、マス・コミの為に仮装したマス・コミの権化である。その厚かましい弁舌と、天も恐れぬ度胸は、正に、天文に値する。併し、彼の話を分析するならば、「すいません」と「山田さんの奥さん」と「ヨシコさん」、そして、後は他人の模写をしたキャクの反復でしかない。確かに、ジョーク・メーカーとしては、天才ではあるが、落語家三平とは、分に不相応である。落語が、その発祥の姿に退化したのが、三平である。だから、彼は、大道芸人の現在形、即ち、テレビの申し子と言える。名人と言われる話家には、それぞれ　その人の特芸、名人芸がある。話家である以上、その人しか、その話の本当の味を出せない至芸があって、当然である。三平の落語とか言うものには、ダジャレは無数にあっても、表面的風刺はあっても、庶民の生活の笑いはない。だから、彼は、うけない時はあっても、決して、失敗する事はない。

落語が、元来　小話の集大成であったとしても、話家の不断の努力と琢磨とで、普遍的庶民性を浮き彫りにしたからこそ、今日、芸能として、庶民の生活の真の本質を伝えるものとして、残存して来たのである。

私は、古今亭志ん生を人間国宝に指定し、林家三平に漫談家の、立川談志に語弁家の名を与えたい。

恩師批判；

私の新制中学時代の教師は、ホーム・ルームの時間によく説教をした。当時は、一々感心して聞いていたが、今にして思えば、実に傑作である。先生は「人には親切に」「努力すれば精神一到何事か」とか、「エチケットは守りましょう」とか良く言った。その頃に、彼の先生が、授業の途中で飲んでいたのが、いもりの粉末で、私のイニシャルのM,Mを見て、ニタツと笑った事等を、正しく理解していたなら、あの道学者風の説法も、瓦一つで吹き飛ばしていただろうに。先生の教え給うた道徳には限界がありました。その限界内では、先生の訓めは実に美徳であった。精神一到、何事も成らず、正しし、正に正しい理論から、精神一到して、実践を行なおうとしたのに、社会の秩序を撹乱し、支配者の利益を損なうから、止めよ、とどなられました。それでも、尚、先生は精神一到、初志貫徹せよと言われますか。併し、それを貫徹すると、先生までが、私達の初志に矛盾した存在になって、先生の生活をも完全に塗り変えねばならなくなるのですか。皮肉じゃありませんか。先生、あなたは、この浮世では、精神一到、如何ともし難しと良く知っておられたんじゃありませんか。だから、貴方は先生への道を択られたのでしょう。先生、親切にまで限界がありました。早い話が、私達が先生の奥さんに、無限に親切を尽せば、先生が怒られる様に、私達は、常時、適限を掌握した者の顔色によって、親切を施す対象を、選択しなければならないのです。エチケットにしてもそうです。私達は、私達自身の生活を存立の危機に瀕せしめない程度に、エチケットを守ります。紙屑は、無闇には捨てません。他人に、迷惑もかけません。なぜなら、それらは、私達の生活に、直接、かかわり合いがないからです。併し、賓客は、門前の立話で通します。それは、賓客の歓待が、財政的に苦痛だからです。

先生、貴方は西方浄土の教訓を、私達に示されたのですか。先生の教示された訓めは、私達の毎日とは、いささかも、連関がないのです。

先生、私達は、次の様に言ってほしかったのです。

「人には親切にしなさい。但し、同時に、人を見たら泥棒と思いなさい。」

「努力すれば報われる事も、時々あります。努力と言う言葉は、人間が、絶望しない為の救いなのです。」

「エチケットは、当分は、完全に無視して、仮りに、君達が成功して、他にする事がなかったら　守りなさい。」

恋愛至上主義批判；

天文学的大昔、この地球上に、[illegible]の発展した細胞が生じたが、この生物である前以は、それが、消滅する以前に、新しい生体が発生する生殖作用を行う点にある。生体の有機的発展に伴い、脳の構造、形態も発展した。解剖学にも、明白な様に、生殖器と大脳とは、神経を媒体として、複雑に両連して居り、人間の生殖作用に於ける大脳の間接的運動は、もはや不可分の要素である。更に、有史未の人間にあっては、元来の生殖器に依る直接運動以上に、大脳の間接運動が、生殖を支配する様になった。

併し、現在にも、多くこの事明の現象を、誤解した一群が居る。彼らによれば、恋愛が存在して、生殖は存在しない。恋愛は高等で、生殖は劣等となる。自己の理性を、誇示せんばかりに、正常な形態の性的欲求を、押し殺して、禁欲主義に陥っている。彼らは、恋愛は神聖で、絶体で、恋なくしてこの世は生きられぬと、つり堀りの親爺みたいな事を言う。精神的表面的結合を、無上の美徳と信じ、Sex の一字にも、しかめ面をする。この観念論者の信ずる神聖は、単に、肉欲的でないと言うだけであり、又、絶対と言うも、性の偶然を、必然と混同しただけで、虚構に充足している。理性から逃避した性欲が、異常である様に、性欲から逃避した理性も異常である。禁欲主義の坊主が尊高く、崇高であるなぞ、およそ、不自然で、恐ろしく異常である。

「あの上人様も、そりゃ、人間だから、そんな気になられる時もあったろうが、それを乗り越えられたのですぞ。このバチ当たり。」

「なぜ、乗り越える必要があったんだ。出る物は止めずだ。バカ。」

この中世の禁欲思想が、今に、恋愛をオー義とし、性欲を包み隠す偽何として残っている。それは、美徳でも、良識でもない、社会に適応出来ない人間の言い逃れであり、ヒカレ者の小唄でしかない。

後輩諸君よ！

秋田恒宏　無器用に、要領悪く、バカ正直で、クソ真面目。明るく朗らかに、希望を捨てず、楽天的に生きてゆきたい。

秋元　明　自己の存在、とりわけ客観的、社会的なそれを大きなものとして意識することから我々の第一の態勢がはいまるでしょう。君は偉大なる、内に偉大なる創造性と、包容力と、爆発するエネルギーを秘めた大衆のちっぽけな点であること。とるにたらない、だがしかし誠実で、赤赤をみつめた、豊かな人間であるような存在。そういった存在へ自己の意識を集中してゆくべきではないでしょうか。

大橋武久　大学生活四年等は、すぐたってしまう。その上、休みが多いから、実際大学生活というのは二年位であろう。その中、半分も有意義な一年間を、卒業論文作製の時期、即ち四回生に持ってくる様に大学生活を送る様に、三回生以下の方に忠告しておこう。そのためには、充実した四回生生活を送るための、スタミナと、ちょっとやそっとで見破られぬ様な一見卒論と見える程度の、実験を成せる位の、基礎知識を身につけておいて欲しい。実際、我々はこれらの条件を満足させなくて四苦八苦しているのだから　又三回生の方には、夢ゆめ、卒業論文を素晴らしいものにしてやろう等という助平根生は持たぬ様に忠告しておこう。一年位でいい成果がでる事などあり得ないのだから。それよりも、つまらないものでもX線や、ガスクロや、赤外にかけてもらって、喜んでいる方が、純真というものである。

榊原敏元　大学院など受けずに、麻雀とバレーボールをやれ!!

熊部国彦　飛ばない鳥は落ちない。落ちることはあっても飛ぶ鳥でありたいものです。工繊での四年間はあまり面白くないものでした。沈滞したムードを打破して下さい。青春を謳歌するというようなふんい気が工繊にもあってよいと思います。

坂田輝夫　僕の一番言いたい事は、「時間を大切に使え」という事である。どちらかといえば封鎖的な本学にあっては、各自の積極的な努力がなければ、つまらない学生生活に終ると思う。意義ある学生生活を送る為には、恒久く色々の事を体験していくと同時に、少くとも一

っは確固たる信念を持つ持続性のある物事を持ってほしい。
満足感のいくところまでやり抜くように心掛けるべきだ。学生生活を有意義に出来るかできないかは本人次第だ。

松尾主造　自分の信念に対して忠実に、誠実に生きていって下さい。実験、勉強、運動、いずれも身体が第一です。健康に十分注意して、残りの学生生活を、真に意義あるものとして下さい。

秋田　佳宏　ワコールK.K.
浅田　泰裕　住友電工
池上　正道　共和社油脂
鵜野　高賀　京工繊大大学院（工芸）
大橋　武久　阪大大学院（工）
大屋　重光　阪神百貨店
河嶋　康夫　竹仁染工
神田　　健　第一レース
喜多島豊宣　共和レザー
木谷　順一　ロックペイント
青村　　旦　丸紅飯田
小嶋　一晃　日本油脂
榊原　三司　三京化成
鈴木　敏夫　旭化成
高嶋　英雄　浅セロ化学
高橋　裕介　大日精化
橋　　健一　興国人絹パルプ
田辺　勝利　京大大学院（理）
田淵　康元　関西帆布
千代　国夫　日本化薬
土岐　六郎　厚木ナイロン
時田　　玄　神戸ペイント
奴賀　芳夫　呉羽化学
布瀬　俊治　大阪紙工
服部　国治　三ツ星ベルト
牧田　輝夫　京大大学院（理）
松尾　嘉徳　呉羽紡績
宮崎　能久　住友3M
山内　康久　宇部興産

編集後記

秋来りなば冬遠からじということで、いよいよ冬仕度の頃と相成る次第ですが、C科の皆様いかがお過しでしょうか。今回は自治会特集を載せるつもりでしたが、原稿が集まらず、日の目を見るに到りませんでした。テーマが大ざっぱすぎて書きにくかったのかもしれません。お詫び致します。

それにつけても、編集の意志がもう少し紙面に表われる様、努力したいと思います。皆様の御批判と御注文をお待ちします。

今回寄稿下さった方々に感謝しつつ、本年度の編集を終ります。残された期間の皆様方の御健闘を祈ります。

Chain　No. 21

発行日　昭和40年12月10日
発行者　京都工芸繊維大学・繊維化学科
印　刷　青倉印刷所　(81) 3374
編　集　繊維化学 Chain 編集部
編集代表　小林新一